

概 観

中世とは、源頼朝が平氏の政権を倒して鎌倉幕府を開いた時（一一九二）から、織田信長が戦国の動乱期を統一して、十五代将軍足利義昭を追放した一五七三年までの約三百八十年間で、時代区分としては鎌倉時代、南北朝時代、室町時代（戦国期を含む）の三つに分けられる。

この時代は武家による政権が成立し進展していく時代でもある。又前代に成立した荘園制が武士による侵略を受けながら、変質し崩壊していく時代でもある。このように中世は政治、経済、社会のあらゆる面において、封建制が発生し成長し確立していく時代であった。それでは古代において肥前国の政治、文化の中心地として存在したわが大和町は、中世においてはどのような歴史を展開したのであろうか。肥前国府、特に現在の佐賀市郡、小城郡の歴史の移り変わりに関連させながら、時代区分別にその歴史を探ってみよう。

一、鎌倉時代

概 説

保元・平治の乱の勝利により権力をつかんだ平清盛は、その地位を更に強固にするため、妻の妹を後白河院に勤めて後の高倉天皇を生ませ、外戚の地位に就くと共に太政大臣の地位にまで進んだ。この一六七年前後の年間で平氏の勢力の最も盛んな時代であった。しかし、「平氏にあらざれば人にあらざ」と放言してはばからない一族のおごりは、次第に人々を反平氏の行動にかり立てていった。このような

事情を背景に、源氏一族の拳兵が相次ぎ、世は源平の争乱期を迎えるのである。

この争乱は源氏の勝利に終わり、一門の花と栄えた平家が、壇の浦の藻屑と消えて、世は再び源氏に花咲く春となった。源頼朝は建久三年（一一九二）、源氏に関係の深い鎌倉に幕府を開いた。それ以後百三十年余りを鎌倉時代と呼んでいる。

文治元年（一一八五）十二月、源頼朝は朝廷より日本国総追捕使及び総地頭に任命され、弟義経を捕える理由で全国に守護・地頭を置いた。それまで地頭のいなかった荘園や公領にも幕府の代官が入り込むようになったのである。

守護は国司と並んで国ごとに置かれたもので、頼朝の家来すなわち御家人の中から任命した。守護は国内の軍事・警察権及び御家人の統率に当たり、地頭は荘園を単位として御家人を任命したもので、年貢徴集などの荘園の管理、荘園内の治安維持がその職務である。地頭は荘園の管理者として働くので報酬が認められ、一段に付き米五升が兵糧米の名目で収入とされた。又新任の地頭には田畑十一町に付き一町の給田畑や加徴米取得権があった。更に正規の領主に對しても、何かと理由をこしらえて上納（年貢米）を減らしたり納めなかつたりして私腹を肥やしていったのである。「泣く子と地頭には勝てぬ」という言葉は当時の農民の地頭に対する感想である。

このように、幕府の根幹をなす機構は御家人である守護や地頭であるが、幕府は彼らと主従の関係を結び、彼らに保護を与え領地を授ける幕府の「御恩」に對して、彼らは主君の恩に報いる「忠誠」とか

「奉公」という道德的義務を感じていたのである。一朝事ある時には一身一家を顧みず、おっとり刀で幕府のもとにかけつけ、かねての御恩に報いることを武士の本領と心得「いざ鎌倉」という言葉を生んだのである。当時、九州は政治・軍事の上から特に重要視され、太宰権帥の復活を始め、建久三年（一一九二）には、公領や荘園において武士が実力行使によつて国司や領主を困らせるのを固く取り締まり九州の軍事を司どらせるため鎮西奉行（文永の役後鎮西探題となる）が置かれている。建久七年には武藤資朝、大友能直、島津忠久らの三人連帯で鎮西奉行職に就いたが、資朝は又太宰少貳（太宰府次官）に補せられ、太宰府の事務は代々武藤氏が司どるようになり、後に名も少貳と改めた。

こうして、鎌倉幕府は制度を整え全盛期に達した時に当たり、突如全国を恐怖と不安のどん底におとしいれたのが蒙古の襲来である。元（蒙古）の世祖フビライは朝鮮の高麗を征服したのち、文永五年（一一六八）正月我が国に對し、

「冀自今以往、通問結好、以相親睦、且聖人以四海為家、不相通好、豈一家之理哉、至用兵、夫熟所好、王其國之不宜。至元三年八月 日」

という国書が太宰府にもたらされ、表面は通交を求めるものであったが、裏面には属国になることを要請し、応じなければ出兵するかも知れないと言っている。時の執権北條時宗は若冠十八才であったが断固としてこれを退け、九州北部や長門（山口県）は元の襲来に備えて守りを固めた。肥前の武士達も多方面の沿岸防備に狩り出されたのである。

文永十一年（一二七四）十月、元は大小九百隻の兵船に二万五千六百人の將兵を乗せて来寇し、五日に對島の西海岸を襲い、十四日には壹岐を侵し、続いて松浦地方へ攻めてきた。對島壹岐の守護代宗資國、平景隆も戦死し、捕えられた者は殺された。十九日元の軍船は博多湾に入り、翌十二日早朝から東の箱崎、博多方面、その西の佐原、赤坂方面、更に一部は今津方面と三方より上陸した。

我が国は苦戦となりついに太宰府まで後退させられた。しかし、どう思ったのか元軍は夜になると船に引き上げた。その時、大暴風雨が起って高麗史によると溺死者一万三千五百人を出し、一夜明けると元船はどこかに消えていた。鎮西要略によれば

「文永十一年九月、異国大元蒙古船……（中略）太宰少貳経資、大友頼康、菊池、原田、松浦党、臼杵、戸次、紀伊、山鹿、小玉党、草野、高木、龍造寺、高来有馬純党、大村、西郷、深掘等及神職社務、山徒、防人、都十万余騎至壹岐、松浦、今津、博多姪浜、所々相戦於蒙古数万之兵……」

とあり、北部九州の武士はほとんど参戦しているようである。これを文永の役という。更に建治元年（一二七五）と弘安二年（一二七九）の二度にわたって元は使者を派遣し、我が国をおどしたが、時宗は二度ともこれを斬って断固たる決意を示した。そして幕府は北部九州や長門（山口県）の固めをいよいよ強くした。九州には北條実政を、長門には北條宗頼を下して御家人を統率させ、異国警固番役を強化した。番役は筑前及び肥前の沿岸の重要地点を輪番に守備するもので、各国の守護がこの勤番の指揮監督に当たった。肥前国の警固区域は始め博多であったが後に姪浜に変わっている。

弘安四年五月、元軍は艦船九百隻、四万の兵を持つ東路軍と、艦船三千五百隻、十万の兵を持つ江南軍とを編成して、再び對島、壹岐を襲い志賀島に迫った。東路軍は江南軍と六月十五日壹岐で合流する予定であったが、抜けがけの功名をねらってか、六月六日に博多湾に迫った。しかし博多湾はすでに石塁を築いて防備され、肥前武士の勇戦に屈して、東路軍は一旦肥前鷹島へ退いた。ここで江南軍と合流、二十日以上もたった七月一日、大挙して博多湾へ侵入、太宰府を直指す上陸の準備を終わったところに、その夜再び海は大しけとなり、元の軍船は將兵もろとも散々痛めつけられた。これを弘安の役という。高麗史は高麗軍四万のうち生還者一万九千三百九十七名と記している。

元はこの二度の戦いに破れたが、その襲来の恐れは決してなくなったわけではなく、異国警固番役や要害石築地役は引き続き続いて行われ、その費用は莫大なものとなった。この元寇とその後の警備等のため幕府の財政はいよいよ苦しくなり、御家人の没落も急に目立って来た。

一方、この時代の文化としては、平安末期に起こった法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、鎌倉時代になると日蓮の日蓮宗（法華宗）、栄西の臨済宗など宗教が盛んになり、宗教に伴う建築、彫刻、絵画等も盛んになった。武士の好みを反映してか、平安時代の優美さに対して鎌倉文化はその力強さが特色と言えよう。実用的で簡素な武家造りもこの時代から生まれたのである。

1 鎌倉時代と郷土

頼朝は弟義経を捕えるという名目で国ごとに守護・地頭を置いた。一方、朝廷側も国司を派遣してい

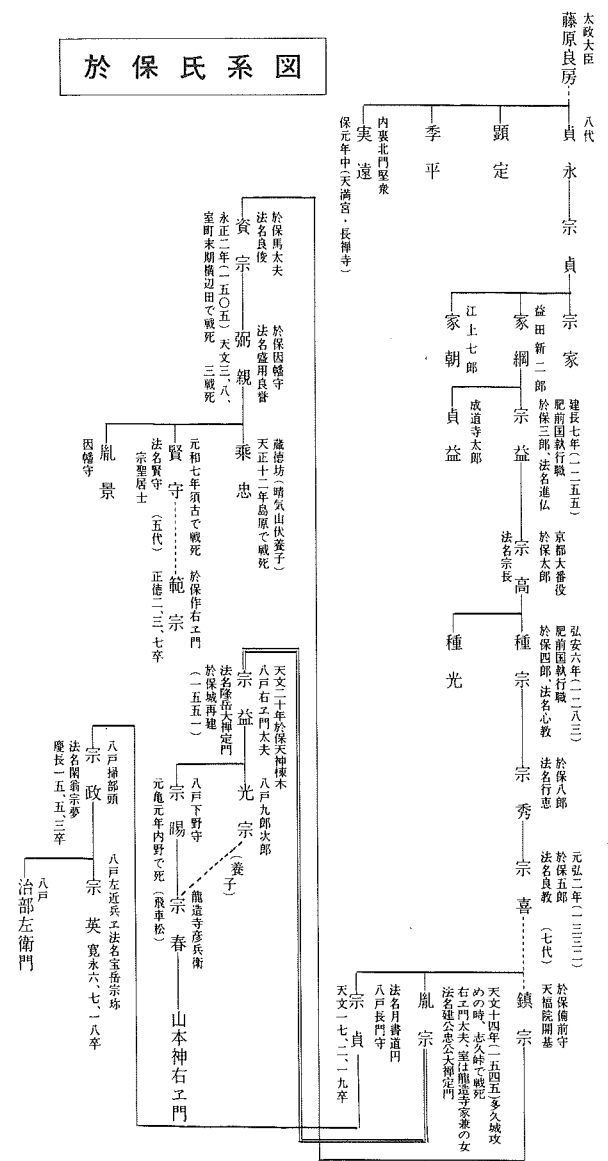
姫社に参詣したのが祭礼の日であった。たまたま参詣していた高木氏の一行と出合った。高木氏は上佐嘉を領地としていた勢力の強い豪族で、甘南備峯に本城を築き居館は高木瀬に持っていた。そして河上社の大官司も兼ねていた。当日高木氏は多数の部下を従えて来ていたが、社辺にいる参詣者達を引きずり出し、あるいは追い散らし着物に泥を上げ上げるなど、その所業は無礼極まるものがあつた。時頼はやつとの思いで宿へ帰つた。その後高木氏は上佐嘉の領地を削られ、その地を国分忠俊に与えた。」とある。

家宗の曾孫家直は後醍醐天皇にそむいて足利尊氏の軍に加わつた少弐氏と行動を共にしたため、延文五年（一三六〇）二月菊池武安の軍に攻められ甘南備城は陥落した。家直は高木に来て新たに城壘を築いた（西高木城）。これより高木城は東西両城となつた。

西高木城主高木能登守鑑房の時、天文二十三年（一五五四）三月、龍造寺隆信の攻撃にあい、西高木城は陥落し、鑑房は家来二人を連れ、杵島郡佐留志（江北町）の前田伊豫守を頼つて行つたが、後、伊豫守の手によって殺された。東高木家の城主高木肥前守胤秀は城を明けて隆信の軍門に降つた。隆信はこれを許して後、胤秀の娘を鍋島清房の次男佐衛門大輔信安の妻とした。

直茂公三徳譜の中に、「鑑房は凡人ではなかつた。魔法を心得ていて酷暑の時分に雪を降らせたり、あるいは暗夜を白昼になす等の事もあつたが、運尽きて前田の手に倒れた。首を落された時、屍体が急に立ち上がり家来達数人を切り殺したので、その後崇を恐れてこの地に荒神としてまつた。」と記してある。

② 於保氏と於保天満宮





於保天満宮



於保氏の墓

於保氏は太政大臣藤原良房を始祖としていることは高木氏と同様であつて、甘南備城主であつた高木宗家の弟家綱の直系が後年於保氏を名乗っている。保元元年（一一五六）保元の乱が起こり、京都の町は不穩の状態に陥つた。於保氏の祖である藤原実遠はそのころ京都内裏北門堅衆の任（御所警備役）に就いていた。彼はこの不穩な政情を心配して、一日も早く平和が来るよう北野天満宮に祈願を続けた。後白河天皇はこれを聞かれ痛く感激されて、実遠の本国へ天満宮をまつるよう御内命になつた。そこで実遠は北野の神を勧請して於保村北野の地にまつた。又天満宮を勧請すると共に菩提寺として長禪寺をこの地に開基した。元龜元年（一五七〇）今山の陣の時於保家は亡び、龍造寺隆信がこの地を支配したが、後にこの城（館）跡に天満宮を遷して現在に至っている。

館の周囲は堀がめぐらされていたようで、今では道路になりあるいは田畑に変わっている。後年火事のため焼けた長禪寺も再建されることなく廃寺となつたが、場所は於保氏墓の南方一帯のようである。長禪寺に保管されていた天満宮由緒も焼失してしまつたが、寛

政年間（一七八九頃）佐賀藩士族於保作左衛門方に存在していた文書によつて明らかになつた。建長七年（一二五五）のころ、於保三郎宗益は法名を進仏と号し、大和町於保並びに佐賀市鍋島町増田を領し肥前執行職となつた豪族で河上社遷宮奉行をも勤めている。

宗益の孫於保四郎種宗は法名を心教と号し、弘安の役（一二八一蒙古軍との戦）に軍功をたて弘安六年肥前国執行職として肥前国を治めた。於保種宗の所領注進状の中に

一、於保村仮名安松代々令勤仕御家人役地也

とあり、種宗は鎌倉幕府の御家人でこの地の領主地頭であつた。於保の地を安松名ともいつていたことがわかる。種宗の孫於保五郎宗喜は法名を良教と号し、元弘三年（一二三三）五月官軍に加わり、九州探題北條英時を博多に攻め負傷した。頼朝以来百四十年で鎌倉幕府が滅亡した前年である。翌年建武の新政といわれた天皇政治が始まるのである。

宗喜八世の孫於保馬太夫資宗は永正二年（一五〇五）五月、横辺田（江北町小田地方）の戦で戦死し、その子幡守弼親は天文三年（一五三四）八月三日、大内氏と龍造寺家兼（剛忠）との戦で戦死し、法名を盛用良誉と号した。於保の館も亡び一家没落の悲運時代である。しかし弼親の大叔父（祖父鎮宗の弟）である備前守胤宗は妻が龍造寺家兼の娘であるという姻戚関係から天文十四年（一五四五）正月十六日家兼が多久城を攻めた時これに参戦し、志久峠の戦で討死したが、その軍功によつて於保家もまた再興した。

胤宗の子八戸右衛門太夫宗益の時、於保の館も再興され天文二十年（一五五二）天満宮も再興した。宗益の二男宗暘は八戸を領し八戸下野守と称した。少武氏・神代氏と結んでしばしば龍造寺氏を苦しめていたが、元龜元年（一五七〇）今山の陣で大友八郎親貞の先手に加わり今山にいたが、深傷を負い山内にのがれ内野で死んだ。

宗暘の妻は隆信の妹でその幼児に飛車松と称する者がいた。隆信はこれを殺そうとしたが、飛車松の祖母であり隆信の母である慶闇尼はふびんに思つて命乞いをしたため一命が助かり、後に叔父に当たる八戸九郎次郎光宗の養子になった。後の龍造寺彦兵衛入道宗春である。

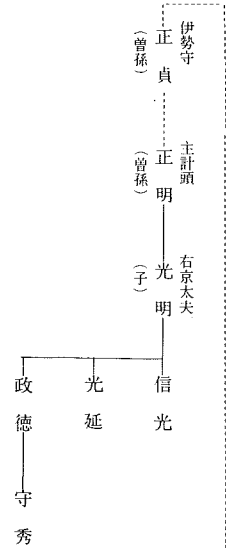
因幡守弼親に三人の男子がいた。長子は藤太郎兼忠といつて晴氣山伏の養子になり藏徳坊といった。天正十二年（一五八四）島原の合戦で戦死した。二男式部太夫賢守は須古の戦で負傷し、そのため元和七年（一六二二）死去、法名を賢守宗聖居士と号した。子孫は長く鍋島家に仕えた。

大和町於保一带を領した於保氏は平安時代から中世に至る四百年間にわたり、あるいは地方に君臨し、時には悲運を迎えるなど戦国の世の常とはいへ栄枯盛衰の時代であつた。現在、天満宮（館跡）の西南の地に因幡守胤景以下の墓石が列んでいるが、数百年の歳月を経た墓地は荒れ放題でまつる人もないまま放置されていたが、これを憂えた現円通院於保禪機氏により時折り供養されているに過ぎない。

③ 兵動氏と兵動八幡宮
室町時代から近世にかけ旧川上村佐保に豪族がいた。

從五位下 從四位左工門尉 兵藤丹波守 佐藤の祖美濃守 兵藤太夫 刑部太夫 治部太夫 藤原改め兵動 左馬助
 藤原鎌足二十代 文 行 光 行 文 行 正 經 五代 正 職 正 之 二十代 正 光 正 直
 (二男) (孫)

兵動氏系図



遠い先祖は藤原鎌足の流れを汲む藤原氏で、始め藤原姓を名乗っていたが正光の時から兵動姓になっている。正光の先祖に兵藤正経という者がいた。寛治元年（一〇八七）十一月十四日、八幡太郎義家、新羅三郎義光兄弟が清原家衡、武衡を金沢柵（秋田県仙北郡金沢町）に包圍し攻め落した。義家が飛ぶ雁の列が乱れるのを見て敵の伏兵を知り、危いところを免かれた話もこの時の事である。世にこの戦を後三年の役という。

兵藤正経はこの時源義家軍の先手の将として戦功をたてたので、三河国渥美郡（愛知県）一円を賜わり、子孫代々この地を領して住んでいた。それから約百年後の治承四年（一一八〇）、正経から五代目に当たる刑部太夫正職は平氏打倒の兵を挙げた源頼政の軍に従い、平清盛軍と戦つて宇治山田の合戦で

戦死した。正職の孫に当たる治部太夫正之は文治元年（一一八五）、頼朝の命を受け平氏を攻めた弟範頼の軍に従い生田（神戸市）で戦死した。

兵動左衛門太夫正光は正之の十代目の子孫である。幼名を勘七郎といった。肥前国兵動家一統の祖といわれる人で、藤原姓を兵動姓に改めたのもこの人からである。

今から約五百四十年前の永享二年（一四三〇）、時の將軍足利義教の命を受け九州探題になった渋川満直に従ったのを機会に、肥前国佐保村（旧川上村佐保）に居を構えた。彼は武運を祈るため鎌倉八幡の神霊を勧請して当地にまつり兵動八幡と名付けた。所領石高は判明しないがここに住むこと十四年間、文安元年（一四四四）この地で死んだ。

正光の孫左馬助正直は明応六年（一四九七）多久梶峰城で戦死し、正直の曾孫正貞は天文四年（一五三五）筑後の原田秋月の軍が来襲した時、千葉氏に属して山内で戦い市の瀬で戦死した。

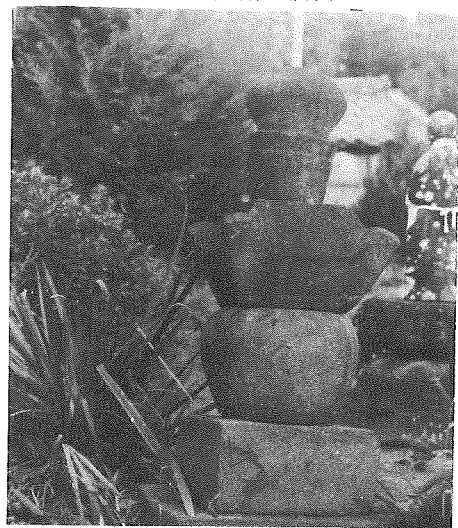
正貞の曾孫正明は幼名を城太郎と称し、元龜元年（一五七〇）芦刈の衆と戦い牛津で戦死した。その子右京太夫光明は佐保村、榎田村、池上村等九十町余を領し龍造寺隆信に仕えていたが、天正十二年（一五八四）三月二十四日島原攻めの時光明、光延、信光の親子三人とも戦死した。

光明の末子政徳は小城一代藩主鍋島元茂に仕え、子孫もまた代々小城藩に仕えた。

兵動八幡宮の例祭（旧曆十一月三日）や社殿の修造等昔から兵動一族によって行われていた。後年正光追善のため一院を建立し正光院と名付けた。代々その菩提寺であったが維新以後になって廃寺となっ



兵動八満宮



兵動五輪

た。現存する八幡宮は天満宮と併祀され、鳥居には天明五年（一七八五）乙巳天二月の刻銘がある。正光院の寺地がどこに

あったか判明しないが、恐らく八幡宮南方墓地がそれではなかったろうか。墓地の一方所に寄せ墓があるが、正徳、享保、享和の年

代銘が残る五輪墓や正光院住職の墓と思われる無縫塔が建っている。

(2) 郷土の寺社

① 水上山万寿寺（お不動さん）

仁治元年（一二四〇）神子和尚が開山した寺で、四條天皇から「水上山興聖万寿寺」という寺名をも

らったといわれる臨濟宗の寺である。本尊は神子和尚作と伝えられる不動明王である。

「鎮西要略」並びに「開山行業記」の中に

『大治五年（一一三〇）水上山に善住という異僧がいた。天台宗の僧で、ここで不動の法を修すること多年、天がその仏心に感応してその年の五月二十八日丑の刻（午前二時）に宝剣を下された。天皇の

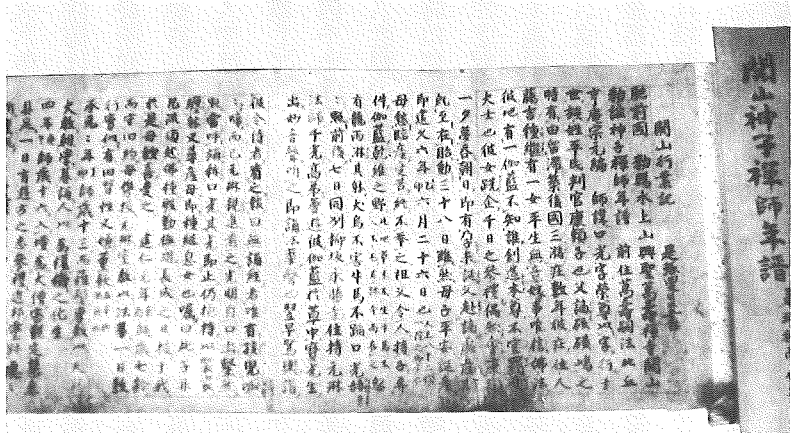
お言葉によって一旦宮中に収められたが、瑞相がしばしば起るので再び水上山に返された』



万寿寺



神子和尚肖像



神子禪師年譜

とある。この宝剣といわれるものは現在寺宝として保管されている。

万寿寺の開山神子和尚については二説がある。万寿寺に保存されている「神子禪師年譜」には、

『神子和尚は名を「口光」といい又「栄尊」と呼んだ。平氏の判官康頼の子である。父が硫黄島に流された時、わけあって筑後国（福岡県）三瀨庄に数年間住んでいた。その住人藤原種継に一人の娘がい

た。嫁に行く気持は全く無く、ただひたすらに仏法を修めていた。この地に誰が建てたかわからないが、「不空羅素大土」を本尊にした大きな寺があった。

彼女はこの寺にはだして千日参りの祈願を立て、ある日たまたま康頼に出合った。ある晩のこと、朝日を呑んだ夢を見て懐妊した。まだ子供が生まれぬうちに硫黄島に行つてから、やがて産気付いて三十八日目に出産したが、母子共に健全であった。時に建

久六年（一一九五）六月二十六日である。しかし祖父はこの子を野原に捨てさせた。永勝寺の住職元琳法師は夢に、野原の草の間に法華経を唱える妙音を聞いた。和尚は翌朝人をやって探させたところ、お経を読んでいる人はいなかったが、ただ赤ん坊が捨てられて泣いていたという報告を受けた。そこで和尚自ら行ってみると赤ん坊の口から光明がさん然と輝いている。やがて生みの母を探して「この子は凡人ではない。必ずや仏種を起すであろう。大事に育てよ」といって、この子に「口光」と名付け母も歡喜して育てた。承元元年（一一〇七）十三才の時髪をおろし、天台の教えを受け、嘉禎元年（一一三五）四十一才の時、商船に乗り平戸から十昼夜の後宋に渡った。この地で三年間修業し、歴仁元年（一一三八）日本へ帰り、二年の後肥前河上宮に参り、ついで一沙門の勧めによって水上山に来て禪寺を建てた。時に仁治元年（一一四〇）、師の年四十六才であった。』

と記されている。

鳥栖市下野立石清治氏所藏の記録によれば、

文治元年（一一八五）四月旭村千年川（千歳川）畔の立石儀右衛門宅を訪れる一隊があった。それは屋島・壇の浦の戦に敗れた安德帝以下二位尼、平宗盛、平知時ら数名の一団であった。彼らが儀右衛門に語ることは、

「去る二月十九日屋島の合戦で敗退した平氏の本隊は小倉に上陸、その中七十名ほどで安德帝を奉じ太宰府に行った。その時、御幼帝はにわか発病され、御看病申し上げるうち早や三月になった。ある日

源義経より宗盛へ次のような親書が届いた。

『来る三月二十四日、壇の浦にて最後の決戦を開く事と相成り候。ついでには御幼帝の御上を案じ申し上げ候。身替りを立て御無事御遠路にお立ち退き下さるよう願わしゅう存じ候。』

この時、二位尼の忠臣である古賀春時の妻初音とその子喜太夫の申出により、二位尼と帝の御身替りになって、建礼門院以下平氏の兵らと共に出陣した。壇の浦に到着するより早く海戦となったが、たちまち平氏の敗戦となって、初音、喜太夫は海に沈んだ。建礼門院は捕われ京都へ送られた。一方、太宰府では安德帝の御病もよくなったので、宗盛、二位尼、伊勢女らの一行は筑後浮羽のあたりに逃れ、宗盛は自領である田代（鳥栖市）に行き、恩顧の士を集め主上をお迎え申し上げた。

当時、筑後国藤吉に平家の臣で藤吉種継という富豪がいて、小笹山（久留米篠山）に行在所（仮り御所）を造り、奉迎申し上げたが、源氏の兵の襲撃を受けたので、幼帝、宗盛の一行は夜陰にまぎれ川を渡り、立石儀右衛門の家に来た。」ということであった。

さて、立石儀右衛門は一族と計らい、当屋敷内におくまい申すことに決し、御一同を百姓風に装わせた。間もなく宗盛は自領対島へ安住の地を求めて去り、翌二年帝九才の時から藤吉種継を師として御学問を修業遊ばす事になり、十六才の春にはすべての御学問を修業遊ばされた。ここに千代姫という種継の受娘がいた。年は十五才、心素直な美しい娘で帝のお目にとまりお通いになるようになった。帝十八才の時千代姫は皇子を御誕生になった。しかし御子の行末を案じ僧籍に入れることになった。帝は二十

五才の七月にわかにか病され正治二年(一一二〇)八月二十五日ついに崩御なされた。千代女は剃髪し、洗切の屋敷内に一字の観音堂を建てて主上の御冥福を祈り、八十五才の天寿を全うした。御子は榮尊神子となって末にも渡り、水上山万寿寺を再建した。

鳥栖市下野の老松宮が安徳帝の御陵といわれ、同じく下野の立石清治氏の裏手北方に二位尼の御墓所、更に西方に平知時の墓がある(豊増幸子ふるさと紀行より)

春日山高城寺を開山した順空和尚(後の円鑑禪師)は当山第三世である。永正十四年(一一五七)六十四代天亨和尚は龍造寺隆信の曾祖父家兼の弟で、後柏原天皇より勅願寺の綸旨を賜り勅願第一世となった。九世是琢和尚は鍋島直茂公の御側役として文禄の役の時朝鮮に渡り、彼の地より画幅を持ち帰ったものが残っている。梁の武帝離宮の図や蓮鷺の図、特に十六羅漢の仏画は明国仇英の画風を伝える貴重な物といわれている。旧藩時代は鍋島家の祈願所となっている。

享保十九年(一一七三)時代の万寿寺は

鍋島家の寄付寺領高四十石余 外山林三町余(三ヘクタール)、寺域 東西十町余(一一〇メートル)、南北十五町余(一一六二〇メートル)

伽藍 仏殿(東西五間半、南北五間) 山門(東西三間半、南北二間半) 鐘樓(九尺四面)
廻廊(東西五間半) 僧堂(東西三間、南北四間半) 方丈(東西七間半、南北四間半)
開山堂(二間半四面) 宝剣閣(一間半四面) 庫裡(東西四間、南北八間半)

茶室(東西三間、南北七間) 廻廊(東西五間但庫裡茶室の間) 惣門(東西二間半、南北一間半) 中門(東西二間半、南北一間半) (※一間は一・八メートル)
塔頭(子院)八庵(妙高院・大同庵・靈光庵・宝珠庵・光明庵・黄梅庵・徳雲軒・正覚庵)
末寺八十三か寺、

現在の堂宇は明治五年火災後再建され、その後もまた時々修理されている。当寺の墓所正面の五輪塔が神子和尚の墓で、向かって右側の無縫塔(卵塔)が勅願寺第一世天亨和尚の墓である。

※ 万寿寺にある宝剣の由来並びに神子和尚年譜は「建治元年(一一七五)了因、公俊(いずれも塔頭)これを証す」とあり文永九年(一一七二)十二月八日付神子和尚自筆の置文が宝剣箱内にあったのを写し世に顕すと称して延宝八年(一六八〇)八月田原仁左衛門の文書の写、更に享保十九年(一七三四)三月二十日付塔頭三名(花押あり)になる水上山略記の写、更に元和六年(一六二〇)十一月十日付是琢和尚遷化の後写す とある文書等いずれも写しとして万寿寺に保管されている。神子和尚の後説は鳥栖市下野の立石光男氏(立石儀右衛門後裔)所蔵の文書による。「海の底にも都の候ぞ」といつて八才の安徳帝と共に二位尼は壇の浦に投身したと平家物語にあるがその真偽はともかく、伝説を生むには何らかの背景があるのではないかということである。

② 春日山高城寺

大和町春日地区、甘南備山(二名城山)のふもとに「春日山高城護国禪寺」という寺が建っている。臨

上 三本尊

下 開山堂



済宗で京都東福寺の末寺である。本尊は釈迦如来、観世音、地藏菩薩の三体である。今から約七百年前、龜山天皇の文永七年（一二七〇）に当時朽井（久池井）の地頭職であった国分次郎藤原忠俊（尊光）が時の執権北條相模守時宗の助力を得てここに大伽藍を建立し、東福寺を開山した聖一国師の法弟であった



高城寺の勅額

藏山順空（後の円鑑禅師）を開山として鎮護国家の道場としたといわれている。元弘以来寺領は没収され衰微していたが、建武三年

（二三三六）足利尊氏により寺領が回復された。これより先元弘三年（一二三三）後醍醐天皇は勅額や綸

旨を賜い、山門に勅許を得て「勅賜高城護國禪寺」の額を掲げた。以来勅願寺として歴代朝廷の御帰依も厚く、又鎌倉幕府の祈禱所として尊ばれていた。子院末寺、寺領の田畑三百余町及び山林等を有し、樹木うつそうとした春日山のふもとに堂宇輪奐の美は松籟鳥語に和して法灯一世に輝き、国内の名刹として聞えた道場であった。九州辺地の佐嘉郡春日村高城寺が寺領を回復し堂宇を復興したことは、そのころから高城寺が名ある寺であったことを証するものである。

ところが南北朝時代になって正平七年（一三五二）戦火にあい焼失した。征西將軍懷良親王によって再建されたが、その後二百年を経て永祿十二年（一五六九）大友氏が佐嘉藩を襲った時再び兵火にあい焼かれた。更に幾多の変遷を経ていよいよ昔日の面影を失い漸次衰退していった。

やがて龍造寺氏、鍋島氏が起こるに及び、龍造寺隆信は祈願所三十二か寺の一つとして崇敬し、肥前国における臨濟宗本山として末寺も多く、現に竜泉寺（棧敷）、城徳寺（城崎）、光沢寺（北原）、長谷寺（尼寺）、知徳寺（駄市川原）等がそのまま続いている。鍋島直茂は寺地及び山林を寄付し、以来歴代藩主の祈願所となり藩公を始め鍋島家や藩民の敬仰いよいよ厚く、小城町松尾の円通寺、水上の万寿寺と共に住持の座位も高く、格式もはるかに一般寺院の上にあった。天保十二年（一八四二）筑前の人伊藤常足が著した「太宰管内志」に多久の深江簡斎の言を引いて次のように記している。

『春日山高城護國寺は臨濟派京東福寺の末派で山門の額に勅賜高城護國禪寺とあり、惣門より春日村

を経て上ること三町ばかりにて磴(石段)あり、これを登ること三町ばかりにて山門あり。二間に三間なり。仏殿は四間半に五間、方丈は四間半に八間、開山堂は方三間又鐘樓あり。寺領八十八石余、末寺四十二寺、塔頭一院あり」と。

明治維新になって廃仏毀釈(平安時代以来の日本の伝統的の神仏習合(混濁)を否定し、神道を保護し仏教を排斥した神仏分離の運動)によって、寺領はことごとく没収され、本堂の外建物もほとんど廃滅状態になり荒れ果てて、ついに方丈だけが残る有様であった。ここには円鑑禪師像の国宝があるが、この国宝を安全に保管安置する堂宇さえ頽廢していた。そこで当時の住持佐野惟山師は檀家と話し合い、村長真崎辰五郎氏の熱誠な尽力を得て当寺の再興を計画し、先ず開山堂建立を図り東奔西走の結果、大正六年秋寄付募集を始めたが意の如くならず、この事を聞いた佐賀市中ノ小路古賀製次郎氏は決然として自らこれに要する費用の一切を寄付した。大正七年十一月起工、同九年五月落成、同十一月一日入仏遷座式を挙げた。総工費約二万円であった。こうして開山堂が建立され、稀代の国宝開山円鑑禪師像を安置してやや面目を一新するに至った。

寛政二年(一七九〇)当寺第八十代住持節叟守の時「上佐嘉上郷春日村畝方並地米御改帳控」に

高城寺

御免地 一、境内一反九畝

右同断 一、山林七町余

但し高城寺々領

一、春日村田畑屋敷畔八町七反三畝八歩 地米三十九石三斗

内 田三町三反五畝十四歩 地米十九石一斗 畠一町七反八畝十歩

地米五石七斗 屋敷畔二町二反八畝 地米八石六斗 但村除壞地

東光院五反一畝十歩 地米二石二斗九升九合五勺

右同断 雲龍庵四反 同一石八斗

右者高城寺塔頭 但城山之内御免地 上佐嘉上郷北原村之内

一、富士権現敷地三畝余地米不知 但上佐嘉上郷北原村之内

一、最明寺観音敷地四畝地米不知

右同断

一、御手洗観音敷地四畝余地米不知

右者高城寺支配

右之通御座候

戊八月

※ 順空和尚の事について「肥前古跡縁起」に左のような事を記している。(口訳)

和尚の父がある夜の夢に、一人の僧が来ていうには「自分はしばらく宿を借りたいが貸してくれるか、くれないか。」順空の父はこれを断ったが、無理に貸してくれと頼むので「一体あなたはどなたですか」

と聞くと、「自分は寂照法師だ」と答えたのを聞いて夢がさめた。それからやがて妻が妊娠した。故あって夫婦共都に上ることになって、その途中安藝(広島)と備後(岡山)の境で出産した。天福元年(一一三三)五月一日の事である。子供(順空)が三才になった時、夢の事を思い出して子供に「お前は何か」と聞いた。「円通である」と答えた。父は、さては夢で見た寂照法師とは違っていたのかと残念に思ったがその後しばらく忘れていた。ある時、歌女の歌う言葉に寂照法師が唐に渡ってから円通大師と名乗った事がわかり、霊夢であったと喜んだ。寂照法師は大江貞元入道で、渡唐して吳門寺の住持になつてから円通大師と称した。父はこの子を水上山栄尊和尚に頼んで出家させた。栄尊は彼に順空と名付け、都へ連れ上り東福寺の聖一国師に頼んで弟子にもらった。

○ 円鑑禪師座像

生前は「藏山順空和尚」と称し、遷化(死亡)した後贈名として円鑑禪師といった。前述の通り高城寺の開山で水上山万寿寺第三世住持や臨濟宗本山東福寺第六世住持を務めている。本像は松材の寄木造りで像の内部はけずられ、玉眼をはめ布をはってうるしを塗り彩色が施されている。その後、修理の時頭部内に

写字般若心経百卷、梵、曼陀羅、開基国分尊光(忠俊)筆の願文



高城寺文書

(正安二年(一一三〇)及び次のような願文が蔵されていた。

右宝篋印陀羅尼三十六卷、摺写畢、功德回向真如實際仏果菩提所祈本師藏山和尚寿福增長壇信歸崇法灯久輝至龍華三会之晚山門鎮靜現一華億万之春子々孫々無朽者矣

正安年次庚子(二年)八月十七日 ()は註

書之以藏形像之頭内伏請三宝證明諸天鑑垂 小野比丘志清誌之

禪師は正安二年より八年後の延慶元年(一一三〇八)に遷化しているから座像は禪師生前の作である。今では靴にかなりの虫食いができ、部分的に欠損も見られ、持物の払子もなくなっている。今から七百七十余年前の作で、禪師六十八才の時だから東福寺の住職時代である。そのすぐれた写実は悠揚迫らない禪師の温容を伝えて余すところなく、常人にくらべてやや高い後頭部なども禪師の骨相を忠実に伝えたものであろう。人物像でこのように優秀な傑作は本像を加えて全国中でわずかに三体といわれている。大正三年四月十七日国宝に指定され、法改正によって昭和二十五年八月二十九日重要文化財に指定された。今は県立博物館に移されている。

○ 古文書

後醍醐天皇綸旨三通、征西將軍宮懷良親王令旨、開山禪師號の院宣、鎌倉御祈禱所證文、地頭藤原忠俊、將軍足利尊氏、同直冬、一色道猷、今川了俊、同仲秋、神代長良、龍造寺隆信等の判物並びに旧藩主鍋島直茂の制札、勝茂の證文等数十通の実物又は写しがある。



仏岸・正空の墓

③ 光明寺（廃寺）

大和町今山の北、男女山南のふもとに浄土宗光明寺跡がある。鎌倉三代執権北條泰時の子孫が仏門に入り、筑後国（福岡県）善導浄寺の開山聖光上人の弟子となって修行し「正空」と号してこの地に光明寺を建てたのが始まりとされ、建治年間今から約七百年の昔である。

正空上人は性柔和で頭脳明晰、ついに一宗の奥義を究めた名僧で、その徳を慕う者数多かったという。光明寺の堂宇は「大慶塔の備え厳然として」とあるから大規模な建築だったのであろう。浄土宗寺院調によると、寺領は田畑屋敷五反八畝十六歩、地米八斗三升八合となっている。現存している聖光寺は光明寺の隠居寺で外に末寺として金蓮院、福萬院、宗明院、三淨寺、平等寺、西念寺等が記録に残り、今は皆廃寺になっているが、昔は今山、横馬場一带は仏法繁栄の霊地であった。それからおよそ三百年を経た元龜元年（一五七〇）今山合戦の時、大友の部下九人が当寺本堂で自害したが、その時彼等一党の放火で光明寺はもろろん末寺に至るまで焼失した。それから十余年後乃誉上人という有徳の僧がこの地に寺を再興し在住すること数年、のち還俗して堤又二郎と名乗り、

大園秀吉の朝鮮役の戦陣に加わり、戦功をたてた事で光明寺の地五十余石を与えられている。こうして栄枯盛衰の過程を経て約三百年前の寛文のころ、臨濟宗の僧仏岸和尚が霊場の荒廃をなげいて信徒と共に荒地を開きお寺を建て、観自在尊を本尊として安置し布教に勤め、併せて北方の峰に弁財天を祭った。仏岸はもともと臨濟の僧であったが、天性浄土の教義に帰依していた名僧である。和尚が如意宝珠経を讀経していると白蛇が現われ、又法華経を讀経していると机上に不思議な虫が出たりあるいは白狐が出て来て経文に耳を傾けたという伝説がある。

後年長崎の福濟寺管主として二十余年を過し、享保十四年（一七二九）八十六才で死んだ。分骨して当山に葬り石塔を建て碑文に「當山中興仏岸圓老和尚、享保十四年己酉天十一月八日」とあり、庵室の西方山中に建てた。（聖光寺古文書による）（享保十四年（一七二九））

二、南北朝時代

概説

鎌倉幕府は二度の蒙古襲来とその後の警備に莫大な費用を使い、その上戦功のあった者に恩賞を授ける土地もなく、御家人の不満も高まってきた。そのような時、幕府の執権北條高時は遊興三昧にふけり統率力を欠いていた。このような状態を見逃さず、後醍醐天皇は討幕の計をめぐらし、正中・元弘の両